

総合の理論をときほぐす

—『純粋理性批判』における想像力の多層的活動—

永守伸年

はじめに

I・カントの哲学にあって、想像力(Einbildungskraft)ほど掘みどころのない能力はない。この能力はカントが手をつけたさまざまな学問にまたがりながら、空想すること、再生すること、産出すること、あるいは創造することにいたるまで、まったく多種多様、とりとめのない働きを担っているように見える¹。それゆえ想像力はその曖昧さをつねに指摘されてきたが、従来、とくに係争点となったのは次のような問題である。第一に、カントの想像力は連想のおもむくまま思い浮かべるという側面を持っており、一見するときわめて心理学的な能力である。もし想像力がヴォルフ流の経験的心理学をとどめているならば、それは超越論的哲学の構想にとって克服されるべき心理主義となるだろう²。第二に、想像力はいわゆる中間的能力として他の認識能力との

¹ Einbildungskraft は『純粋理性批判』における超越論的機能から「構想力」と訳されるのが通常だが、本論はこのように『人間学講義』や『形而上学講義』にみられる空想的・創造的活動、あるいは『第三批判』に登場する美学的活動も射程におさめるために、より一般的な訳語である「想像力」を採用したい。

² たとえば P・ガイヤーは、『純粋理性批判』に心理主義の印象を与える記述が見出されることを認めた上で、超越論的演繹を心理学的前提に依拠しない仕方でも再構成しようと試みている。[Guyer, 1989]を参照せよ。

関係性から論じられている。しかし想像することは判断することと緊密にかかわっており、『純粹理性批判』(以下、『第一批判』)をはじめ、想像力は必ずしも判断からはっきりと区別されているわけではない³。

つまり、カントの想像力は経験的心理学の影響を残しつつも、かといってこれを払拭しようとするれば、今度は想像することの固有性を示すのが難しいという問題に直面する。もちろん、そもそも想像力などなくても超越論的哲学はやっていけるという返答はありうる。P・キッチャーが指摘するように、じっさい、二十世紀のカント研究では心理主義を回避しようとする戦略が共有されており、この潮流のなかで想像力はしばしば判断に組み込まれてしまったのである⁴。

他方、いくつかの解釈は、美学から歴史哲学にまでおよぶ想像力の広い射程を逆手にとり、カント哲学の全体からその意義を見出そうとしてきた。想像力はたとえば『実践理性批判』の最高善、あるいは『判断力批判』の崇高論において固有性を発揮し、批判後期には判断から独立した「想像力の自由」が主張されることになる。近年、R・マクリールや S・ギボンズによっておしすすめられた研究は、看過されがちであったこれらのトピックをあらためて掘りおこし、カントの想像力を発展的に理解しようとする解釈といえるだろう⁵。このような研究背景にあって、本論は想像力の捉えなおしに同調しつつ、その内実をあ

³ 本論はこの点について、第一章において具体例を挙げながら詳述する。

⁴ [Kitcher, 1990]の第一章(pp.3-29)を参照せよ。

⁵ [Makkreel, 1990], [Gibbons, 1994].

くまで『第一批判』の構想から洗いだすことを試みる。想像力の固有性は超越論的哲学の成立とともに打ちだされており、しかもその活動は決して心理主義に尽きるものではない—これが本論の主張である。

そのために照明があてられるのは、「総合(Synthesis)」という活動である。具体的には以下の手続きにしたがって議論をすすめたい。まず、本論が考察の対象とするのは主に『第一批判』の超越論的演繹論である。カントの想像力は演繹論においてはじめて「超越論的な働き」を与えられ、感性与悟性の中間に位置づけられる能力であることが示される。この演繹論について、第一章はおおまかな議論構造を確認したのち、そこで論じられる想像力の内実を判断から区別することで明らかにしたい。具体的には、判断に先立ってなされる総合の活動が浮き彫りにされ、想像力がたんなる心理学的能力ではないことが論じられる。第二章では、「総合」が空間・時間という形式性にすら関与していることを確認したのち、想像力と感性の関係を考察する。本論はこの関係を問うにあたって、想像力が『第一批判』の超越論的観念論に決定的な影響を及ぼしていることを主張したい。

このように、本論は総合の理論を慎重にときほぐしてゆくことで、想像力が超越論的哲学の核心に置かれるべき能力であることを示す。

1. 想像力と概念

1.1 三重の総合の議論構造